

「市立札幌病院の思い出」

市立札幌病院
副院長

ひぐち まさふみ
樋口 晶文



私、平成25年3月で、20年間の市立病院勤務を終えます。長い間皆様には、大変お世話になりました。感謝いたします。院内の職員はもとより連携でお世話になりました多くの皆様に、深甚なる御礼を申し上げます。20年間の思い出とさらに今後の市立病院の期待を少し書かせていただき挨拶に代えさせていただきます。

平成5年、私は釧路労災病院から当院に消化器内科医として赴任しました。北1条にあった旧病院でした。4階建の古い病院で歴史を感じた院内を回ると、狭く暗い建物で初めての当直室は、ソファがベッドになるという部屋でびっくりしました。当直は患者さんが多く訪れ、へとへとになって一睡も取れず朝を迎えました。「これはひどい病院に来た、早く撤退したほうがいい」と正直思いました。しかし普段の仕事は、患者も少なくのんびりして入院ベッドも空いていました。

古い病院は建物だけでなく組織も古く能率の悪い病院との初印象でした。しかし職員は医師はじめナースと優秀な方が多く、まとまればいいなあと感じていました。

平成7年に現在の桑園地区に移転しました。自衛隊にも協力を頼んだ大きな引っ越しは大変なものでした。そのとき、設置した多くの医療機械は素晴らしく、当院もようやく近代化したと思えました。新病院は大きく広々として素晴らしく感じました。その時の経費は420億円かかったそうです。

患者さんは、おそらく1.5倍に増え、急に忙しくなりました。引っ越し当初皆、一生懸命働きました。収入も旧病院時代と比べて大きく増えて、経営的にも十分であろうと思えました。しかし、支出が大きく増えたことが誤算でした。平成8年度の当院決算書を見ると、単年度24億円の赤字、5.8億円の不良債務が発生しております。その結果、平成8年12月には、院内各種職員110名からなる経営健全化対策本部を設置して、経営の改善をめざしました。この会が、当院初めての職員の病院経営参加の組織と思います。この時の報告書を読んでもいただければ、当時の中西院長以下、危機感と経営努力の決意がわかります。

以来、院長以下の頑張りのもと、経営改善のため具体的な対策が多くなされてきました。私も平成15年から副院長を拝命して責任の一端を任せていただきました。

多くのことが行われてきました。以下にそれを列記します。平成14-15年度「市立病院のあり方に関する懇話会」、16-17年度「市立病院改革対策本部」、16年度「地方公営企業の総点検」、17年度「市立病院パワーアッププラン」、20年度「新パワーアッププラン」、24年度「ステージアッププラン」など、毎年目標を作り、院長、事業管理者以下知恵をしばって経営努力を行ってきました。

主な出来事を列記します。平成13年度、第1回目の病院機能評価受審、結果として地下に病歴中央管理システムを作り系統的なカルテ管理をスタートしました。オーダーリングシステム、電子カルテの導入(19年度)DPC参加(20年度)看護師7:1看護の導入(20年度)などが積極的に行われてきました。この中で、コンサルタントの導入は重要と思います。その結果、平成22年度の決算で初めての黒字となり、現在継続中です。当院内に蓄えられた資金も60億近くになっています。

現在、市立病院は、地域医療主体そして急性期の入院治療主体の病院を目指しております。

紹介患者、逆紹介患者を増加する方針で地域医療支援病院承認に向けて取り組んでいます。

このような中、当院地域連携センターの役割と行動力は病院にとって最重要組織の一つとなっています。今後も地域医療機関、介護事業所など一層の連絡強化を願っています。

また市立札幌病院全体で経営参加の心で前向きな行動力で頑張ってもらいたいものです。

桑園移転時から、働く職員は1.5倍(1800人)になっています。素晴らしい人材がいます。皆で助け合ってオープンに語って患者さん、連携の先生方にとって心優しい病院として伸びてほしいと思います。

これまでお世話になりました連携医療機関の先生並びに当院職員の皆様、長い間有難うございました。